

# 山岸徳平博士の現写本考

——実践女子大学図書館山岸文庫蔵本識語編年資料から——

横 井 孝

## 一 山岸文庫本の識語

実践女子大学図書館に蔵する山岸文庫については、中古中世、近世漢文学にいたるまで当該の研究者には周知されているはずである。これまで多くの研究者が来訪、調査をしてきたとおぼしいが、いまだ蔵書目録がないために、外部の方々はいうまでもなく、大学内部の職員ですら十全に活用できる状態にはなかった。

稿者が実践女子大学に赴任して間もなく、常磐松文庫の方の調査整理の声がかかったものの、さまざまな事情があつて、ひと夏の作業だけで頓挫した。のち、物語部を中心とする小規模な黒川文庫を優先して整理をすすめ、かろうじて『黒川文庫目録〔新版〕』（実践女子大学文芸資料研

究所、二〇一一年三月刊）を公刊し、まだまだ十分ではないとはいえ、一定程度の専門的な需要には応えられるようになった。順番からいえば次は山岸文庫である。しかし、その前に整理しておきたい問題があつた。

山岸文庫本のすべてではないが、かなりの書冊に山岸博士による識語・覚書がのこされている。当該書の購入の記録であつたり、当該書の諸本についてのメモであつたり、当該書を入手したころの所感であつたり、それらは多岐にわたる。一学究の研究の記録というだけでも興味が尽きないが、かならずしもそればかりではない。それらは総合すれば、おのずと昭和という時代の——一部大正年間も含まれるが——国文学研究史の趣を呈している。

たとえば、昭和二〇年（一九四五）という多難な時期に

は、つぎのようなものがある。

〔明・王釋登／田中蘭陵（良暢）編『謀野集刪』享保二〇年植村藤右衛門ほか版〕（蔵書リスト番号四六八〇）

昭和廿年五月十二日於東横求之  
四月十三日空襲戰災焼失  
不残一物<sup>云</sup> 既經一ヶ月矣 岸廻舍

〔『文久雜話』文久二年写〕（三一九四）

蕭々雨何情 災後九旬夢未醒  
昭和廿年七月十一日岸廻舍

〔『熊谷道行』天保八年写〕（一二九〇）

昭和廿年八月九日東横階下にて  
脱脂大豆米飯近來損腸胃 岸廻舍

〔『富士の人穴草子』天保四年写〕（一二九五）

昭和廿年南呂九於東横階下求之 岸廻舍識  
近來体力氣力稍消沈 余戰災後財貨書籍在家者  
悉皆販賣有心尚不平靜 加之高田本町僑居却多俗臭<sup>云</sup>  
官舎却仙境也

これらは同年付の記録の一部にすぎないが、特に三月から五月にかけて米軍による大規模な空襲が集中しており、三月一〇日未明の下町空襲が有名だが、山岸（以下、敬称略）が被災した四月一三日、さらに翌々日一五日も大規模な被害をもたらす空襲であった。<sup>1)</sup>ところがそれにもかかわらず、蒐書にはげんでいる日常が見て取れるのである。さらにその一方で、齡五〇を越えていた山岸がどのような感慨を持っていたのか、垣間見させてくれるものでもある。

識語を通覧してゆくと、

〔田中犀『疊辞訓解』〕（六八五）

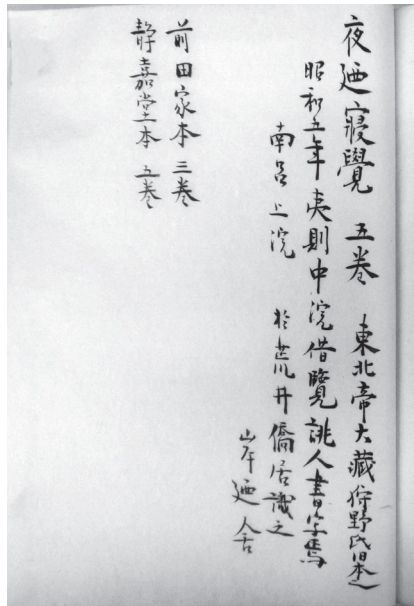
昭和八年八月南呂下浣  
於新宿駅頭夜露店求焉

〔『庭訓往来』〕（七五二）

昭和九年三月廿四日  
岸廻舍

といった入手状況を記録したメモ程度のものの比率はるかに大きい。その一方で、たとえば、東北大狩野文庫本『夜の寢覚』の現写本の奥に「昭和五年夷則中浣（七月中旬）借覽詵人書写焉／南呂上浣（八月上旬） 於荒井僑居識之

／岸廼舎」と墨書した次に、「前田家本 三卷／静嘉堂本 五卷」という覚書を記す例がある（「写真1」参照）。前田家本の影印複製本（尊経閣叢刊『寢覚』）が刊行されるのは昭和八年（一九三三）八月のことであるから、『夜の寢覚』諸本についての知見としては、かなり早い時期のものといえる。



【写真1】山岸文庫蔵『夜の寢覚』現写本識語

これらの例は、まだまだ氷山の一角というべく、さまざまなバリエーションを読みとることができる。特に現写本の場合は、書き込みに心理的負担が少ないせいかな、豊富な情報盛り込んだ例が少なくない。「写真1」は、むしろ寡黙な方である。たとえ一つ一つはささやかな例であり、

片々たる言及の一端でしかなくとも、右にのべたように、総体としては興味深い「記録」であり「資料」でもあり、かつまた浅学の私どもの「教材」でもある。埋没させるには惜しい資料といふべきだろう。

年紀の記載のあるものだけでも相当な例がある。現在、稿者は、それらを一括した編年にした資料を作成しつつあり、なるべく近い将来におおやけにして識者の批正を仰ぎたいと願っている。本稿は、その「実践女子大学図書館山岸文庫蔵本識語編年資料」のなかから、特に現写本のそれを中心にとりあげてみたい。

## 二 山岸文庫の現写本

山岸徳平、出生は明治二六年（一八九三）、没したのは昭和六二年（一九八七）、享年九五（数え齢）。略年譜は「山岸徳平先生記念論文集 日本文学の視点と諸相」（汲古書院、一九九一年五月刊）巻頭に三谷栄一によるものがあり、略伝については久保木哲夫「山岸徳平——博覧強記の人」があり、両者にほぼ尽くされている。従って、本稿では、氏の履歴等についてはそれらに譲って、深くは詮索しないことにしたい。

右に引いたように、昭和二〇年四月一三日の米軍機によ

る空襲のために、それまでの蔵書ほとんどを失い、それにもかかわらず、その直後から孜孜として収集した古典籍は、その他の洋装本の一部とともに実践女子大学図書館に移され、「山岸文庫」として蔵することになった——ということは、学界周知のことであろう。

山岸文庫の古典籍のうちわけは、図書館の整理によれば、以下のとおり（図書館事務・大塚宏昌部長の教示による）。

国書（総記・神道・国史等を含む）	……三八六五
漢籍（経書・儒家・歴史等を含む）	……八〇三
日本漢詩文（小説・随筆等を含む）	……一六二六
仏書	……七八〇
計	……七〇七四

この数字は点数・部数であり、たとえば『湖月抄』の類は、仮に一冊の端本でも六〇冊揃い本であっても「各二」ということになる。識語によれば、これらは山岸が購入したり譲り受けたり、あるいは借覧した本を新写したりして形成した数値である。

「国書」の点数は、さすがに国文学者の蔵書の名に恥じない数値ではあるが、重要文化財・寂恵本『拾遺和歌集』や明融本『源氏物語』などの貴重書、図書館のいわゆる別

置本を含むものの、日本の儒家の著書・神道書・仏書・国史・諸芸・政治経済・地理・総記などを揃えており、総体としては「国文学」のみに偏するものではない。山岸の関心のひろさ、目配りのよさを痛感させるものなのである。

ただし、本貫としての研究対象収集の意識は鞏固としてあり、主要伝本を新写することによって収集した作品は中古中世の文学に集中している。目につくところだけでも、

『源氏物語』『住吉物語』『小夜衣』『松浦宮物語』『海人の刈藻』などの物語類

『源氏釈』『狭衣下紐』などの注釈

『蜻蛉日記』『たまきはる』『とはずがたり』『枕草子』などの日記類

『平治物語』『義経記』『曾我物語』等の軍記

『古今集』『寛平御時中宮歌合』『風葉集』等々の歌集

『蒙求』『作文大牀』『文鳳抄』などの漢籍類

など、これも広範にわたり、主要な作品というだけでなく、『夜の寝覚』東北帝大本のような、当該作品のなかでも重要な伝本を書写することによって、研究の基盤としていることが見て取れる。

こころみに池田亀鑑の蔵書をまとめた『桃園文庫目録』（東海大学付属図書館、一九八六年三月～二〇一三年五月刊）を見ても、多数の現写本の項目をひろい集めることが

できる。写真・影印資料の便宜のとほしい時代、こうした現写本を作成して手もとに置き、研究の便宜にする、ということは明治・大正・昭和、戦前から戦後にかけても常識的なことだった。

しかし、山岸の現写本の特徴は、その識語の性格とさまざまな書き込みというべきであろう。それらは、山岸の「生活」と「研究」をあざやかに顕現する資料として、読み解かれなければなるまい。

たとえば、桃園文庫本の現写本（請求番号 桃六・九）は、『目録』の記載によれば、薄雲の巻の付箋に、

保坂潤治氏秘蔵本薄雲権 表紙 紙製 金泥にて雲の中より月出か、り下部にすすき藤袴なとか、れたり  
原本の大きさ 縦五寸四分五厘 横五寸二分 枡形  
鳥の子両面書 胡蝶装 原本の本文御子左大納言為氏  
卿筆 奥書歌一首 花山院右大将長親卿筆

とある由<sup>(3)</sup>。池田亀鑑の筆跡か否か不明だが、書誌を記した、意味の簡明な識語である。

これに対するに、山岸文庫の「源氏物語 蓬生関屋薄雲」〔蔵書リスト番号 三二七五〕には、標記の三冊分を合綴し、山岸による識語を付しているが、薄雲の巻の奥の遊紙オモ

テに、

光源氏物語 曼珠院本 三巻 借覧

宮田氏写本 詠人書写者也

昭和六年 五月中浣

岸廼舎識

とあって、その面は余白となり、そのウラの面に、

〔有栖川（三字破損） 宮家藏冬良奥書畊雲本与曼珠

院本句点鈎点等一致矣 但書人等曼珠

院本稍多歟 引歌無異同也

（二行分程空白）

昭和四十七年十月十六日訪京都博物館而參觀

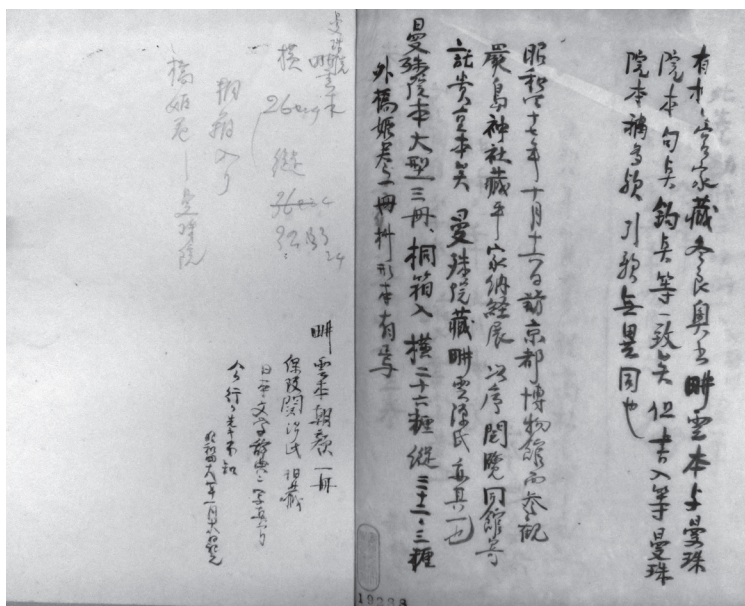
厳島神社蔵平家納経展 以序閲覧同館寄

託貴重本矣 曼殊院蔵畊雲源氏亦其一也

曼殊院本大型三冊、桐箱入 横二十六糎 縦三十二・三糎

外橋姫巻一冊 枡形本有焉

と墨書する。しかも、そこで本文紙が尽きて、裏表紙見返し上部に、この識語の下書きとおぼしい「曼珠院畊雲本／横26センチ 縦（36センチ）ミセケチ）32・3センチ／



【写真2】山岸文庫蔵『源氏物語』曼殊院本・現写本識語

保阪潤治氏 旧蔵

日本文学辞典二写真あり

今行ク先キ不知

昭和四十八年一月十八日記之

という細字のメモがある（写真2）参照。伝本調査の基本としての書誌の記載は当然としても、その書本との出会い、その後の情報などの記述を盛り込んでおり、そこには、周到にして粘り強くあとを追いつづける山岸の姿勢を示して余すところがない。

桃園文庫本も山岸文庫本も、いずれかが優るといふ問題ではない。それぞれの性格を表しているということなのだ。現写本といえば、鳳来寺本『源氏物語』のように、現在では桃園文庫のそれによるしか窺うすべのないものもある一方で、いわばノートのごとく研究の基盤としての現写本もある。山岸博士によるそれは、識語を加味して、研究史に分け入るための、いわば小さな世界を形づくるものとして、概観する意義があるものと考えられる。

もとより、所蔵する現写本すべてを通観することはできない。あらためて言うまでもないことだが、以下は、その一部の、それも一端をかい撫でるものではないことをお断りしておく。

桐箱入り／橋姫巻―曼珠院」などという鉛筆書きがあり、その下部にも、

畊雲本朝顔一冊



### 三 『いはでしのぶ』の場合

平安後期の物語、さらには鎌倉時代に入つての、近年のいわゆる「中世王朝物語」では、研究者層はいたつて手薄にならざるをえない。そのなかでも『いはでしのぶ』は、現在でも特定の研究者しか発言していない作品である。それもそのはずで、議論の基盤である本文や注釈がほとんどおおよけにされていないことが障害としてあるからだ。稿者も専門外ながら、小木喬『いはでしのぶ物語 本文と研究』（笠間書院、一九七七年一月刊）が現在公刊されている唯一の専門書といってよいはずだ。

『いはでしのぶ』は、一条院皇子の内大臣と妻の一品の宮、宮の父・今上白河帝と伏見入道の姉娘、内大臣の息・二位中将（後の関白）と伏見入道の妹娘という男女の關係が入り乱れ、そこに二位中将と伏見入道の姉妹との密通、内大臣の子が白河帝の子・嵯峨帝の継嗣となり、やがて即位する——といった、『源氏』『狭衣』の影響と相まって、人間關係の入り乱れた物語となっている。

山岸文庫には、右にもふれたように『小夜衣』『松浦宮物語』『海人の刈藻』などの鎌倉時代物語と並んで、『いはでしのぶ』の現写本（蔵書リスト番号 三三三二六）を蔵する。略書誌をあげておこう。

写本、一冊。

〔表紙〕 濃紺の紙表紙。

〔寸法〕 縦二七・三cm、横一九・七cm。

〔外題・内題〕 表紙左肩に銀砂子散らし料紙の題簽に「いわてしのぶ」。内題は書本の表紙題簽を模して枠を描き「いわてしのぶ」と墨書。

〔体裁〕 袋綴。一面九行書。

〔印記〕 表紙右裾と題簽に割り印状に「山岸文庫朱印」。本文第一丁オモテ右裾にも同印あり。本文末尾に「岸廼舍藏」（子持ち郭朱印）。いずれも文庫の蔵書印として通常用いられたもの。

奥に遊紙二丁をおき、その一丁目ウラから二丁目オモテの前半にかけて、次のように墨書する。

言はでしのぶ 一卷、京大蔵本也

昭和竜集庚午五年林鐘上浣詭人書寫了  
類本鮮少只藏前田侯三條西伯兩家各一本蔵而已

昭和五年林鐘幾望 岸廼舍

前田本 一卷 卷一二 一冊

（一行空白）

三條西本

図書寮本

まふ↓もふ

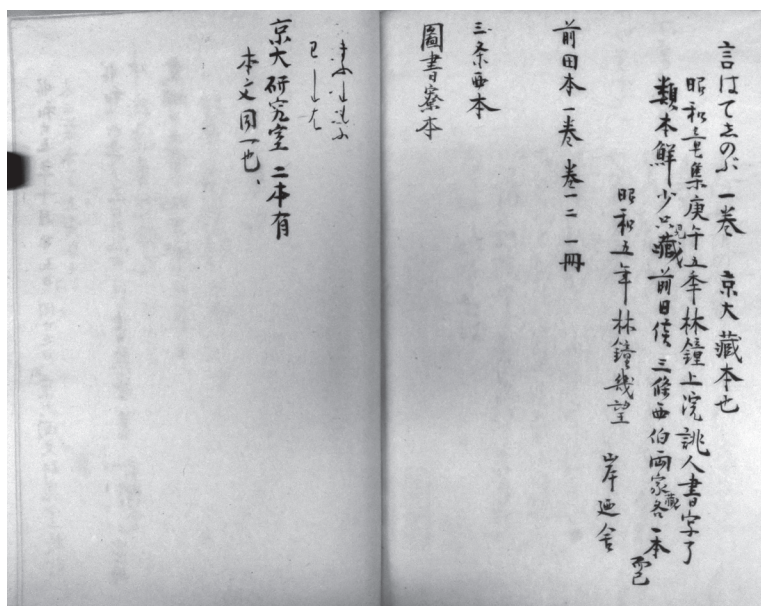
わ（字母「王」）↓は（字母「者」）

京大研究室二本有

本文同一也、

昭和五年（一九三〇）六月上旬、人に書写を委ねていたのが完成したこと、前田・三条西の両家に一本ずつしか蔵していない、稀覯の書だという。同年六月一四日の識語である。

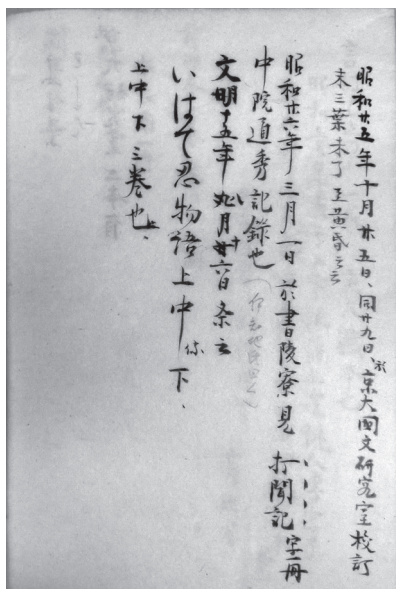
右の識語のうち「』」は丁移りを示す（写真3）参照）。



【写真3】山岸文庫蔵『いはでしのぶ』現写本識語①



ところがこれだけでは終わらず、山岸の同書についての関心はとだえることなく、その後の識語が右の裏面に続く〔写真4〕。



〔写真4〕山岸文庫蔵『いはでしのぶ』現写本  
識語②

いはて忍物語上中下、  
上中下三卷也、

このような識語が追加されている。昭和五年（一九三〇）に京大本を書写しただけでなく、その後も『いはでしのぶ』への関心は持続し、昭和五年（一九五〇）に京都を再訪した山岸は、一〇月二五日（水）・二九日（日）の両日をかけて書本とつきあわせ校訂した。さらに翌年書陵部に赴いた際「打聞記」という通秀の日記の文明一五年（一四八三）の八月一六日条に『いはでしのぶ』『三卷』の記録を見つけた、というのである。

戦争を挟んでの混乱の二〇余年の間、さまざまな書籍を購入し、上記のように幅のあるコレクションの充実につとめながらも意識を拡散させず、各書目への目配りを怠らない様子が見て取れる。もちろん、こうした態度は、当該書に限ったことではない。識語に垣間見る範囲だけでも、どの現写本にもうかがえることなのである。探究心というべきか、研究者としての資質というべきか、はたまた——言葉が悪くて恐縮ではあるが——ある種の「執念」でもいうべきか。飽きっぽく愚鈍の稿者にとっては、恐れ入った持続力というほかない。

当該物語の完本は発見されておらず、小木喬の前掲書に

末三葉未了至黄昏<sup>云</sup>

✓研究室校訂

昭和廿五年十月廿五日、同廿九日、<sup>於</sup>京大國文研

昭和廿六年三月一日於書陵寮見<sup>ママ</sup>打聞記<sup>写一冊</sup>

中院通秀記録也

文明十五年<sup>ハ</sup>九月<sup>十</sup>廿六日条云

よれば、伝本として所在の知れている諸本は、次のごとくだという。

- 1 前田尊経閣文庫蔵本
- 2 京都大学国語学国文学研究室蔵甲本
- 3 京都大学国語学国文学研究室蔵乙本
- 4 宮内庁書陵部蔵本
- 5 大洲市立図書館蔵本
- 6 三条西家蔵本
- ……1の前田尊経閣文庫蔵本、2の京都大学国語学国文学研究室蔵甲本、3の同研究室蔵乙本、以上の三本は同系統の本で、卷一と、卷二の約三分の一の本文を有している。……4の宮内庁書陵部蔵本と、5の大洲市立図書館蔵本は、卷二だけの本である。
- 6の三条西家蔵本は、抜書であるが、物語全卷にわたっているので、物語の全貌を捉えることができる。

(二一四頁)

山岸が「人に誂」えて書写せしめてから八〇年余。現段階では、冷泉家時雨亭文庫に一部断簡状になった残欠本が発見されたのが追加される程度。調査も研究も、山岸の京大本過眼のころとさほど進展しているように見えない。本

文の整備もこれからの課題であろう。

卷一の冒頭、東宮（のちの嵯峨院）の使者として二位の中将が登場し、一条院の一品の宮のもとに和歌をもたらし場面に、次のような一節がある。

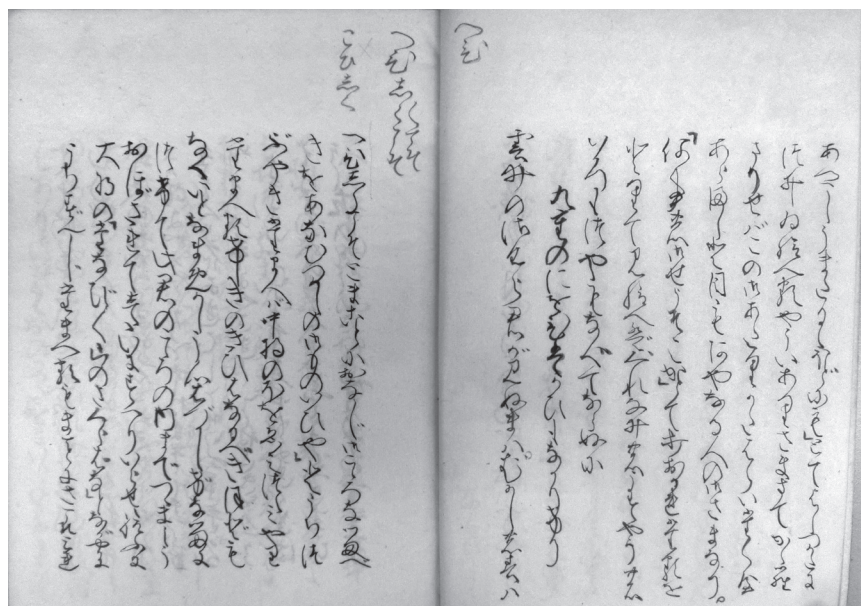
「何事のせうそこにか」とて、打おかれたるを取て見給へば、くれないのうすやうの、色もつやもなべてならぬに、

「こ、のへの匂ひしかひもなかりけり雲井の桜君がみぬまは

むかしの春は恋しうこそ」と、寔におなじ御心なるべきを、「あなむつかしの御物いひや」と打つぶやき給へば、中将のほゝゑみつゝ、みやり給へる御気色の、きびわ成べき程ともなく……<sup>(三)</sup>

小本喬前掲書（以下、『本文と研究』または『本文』と略称する）は、京大甲本に拠りながらも三条西家本を校合してあるので、やや煩雑な表記になっているが、『物語集成』と同一の底本であるため、右の一節はほとんど差異がない。このあたりを山岸の現写本に拠ってみてみると、『写真5』のようになっている。

写真の左側の丁の一行目、「むかしの春は」へひした

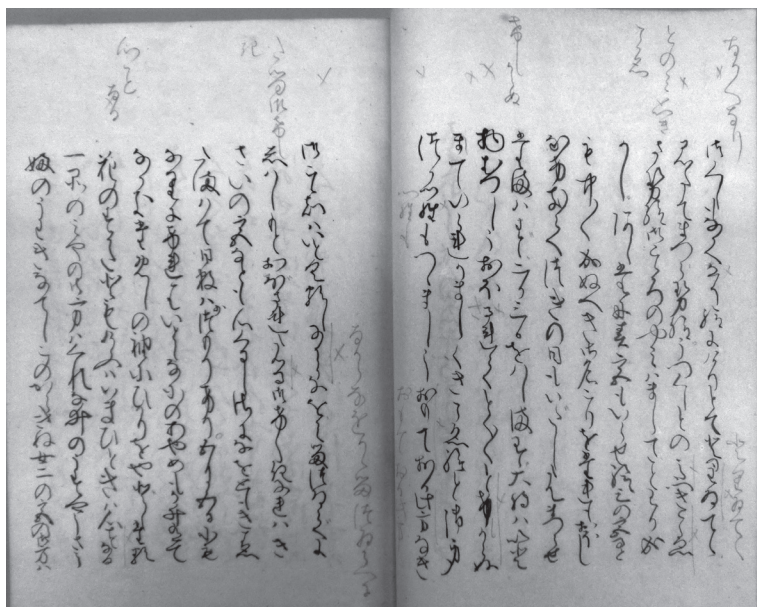


【写真5】山岸文庫蔵『いはいでしのぶ』①

こそとまことに……」と読めるが、意味が通らない。そこで頭書や傍書に「へひ」「へひしくこそ」「こひしく」と草体の訛伝の由来を遡源しようとする、試行錯誤の墨書が記されているのである。一字目「こ」の二筆目（仮名の場合、一画二画と数えないらしい）と二字目「ひ」の字母「飛」の一筆目もしくは三筆目がもとの字画から離脱合体して「へひ」という奇妙な表記になったという類推なのである。そして、その推定の結果が最後の頭書にあるとおり「こひ志く」だというわけである。

ところで、右に見たように、『物語集成』『本文と研究』ともに当該箇所を「恋しうこそ」とする。単に音便変化するか否かの微細な差異に過ぎないのだが、現存本による校訂本文の信頼性を考えるうえで、山岸の現写本は無意味なものではないだろう。山岸は「人に訛」えて書写させた本によって推測しているのであつて、現写本をもって「勉強」「研究」している姿なのであろう。——とすれば、どちらがより正しいのか、と問うのはあまり意味がない。山岸にとつての現写本の意義・位相を考えるべきなのだ。

そのことを考えるにあたって、『写真5』よりも現写本の一九丁ウラと二〇丁オモテの見開きである（写真6）の方がよりふさわしいかもしれない。これは同じ一品の宮が白河帝の召しによって参内する場面から、五月五日の御遊



【写真6】山岸文庫蔵『いはでしのぶ』②

の様子にいたる場面の一部。『集成』一七〇～一七二頁、『本文』一六八～一七八頁の本文に相当する。

写真では分かりづらいかもしれないが、鉛筆によって頭

書・傍書のかんりの書き入れがある。一九ウラ1行目の本文「なかくなり」は「か(可)」が曖昧だというのか、×印を付して、頭書欄外に「なかくなり」と鉛筆書きする。また同じ行下部「とりあて、」は「り(里)」の字体がやや不自然なのに対して、右傍線をほどこして「り」字に×印を付し、「登里あて、」と傍書している。

2行末の「とのたふへきこゑ」と読むしかない箇所にも傍線と×印を付して、「とのミ思き／こゑ」と頭書してある。8行末「とけからぬ」にも傍線を施して「けしからぬ」と鉛筆書きする。「とけ」の字体が分明でなく、「け」に重ね書きがあるための校訂案であろう。

二〇オモテの1行目末の「なから(?)」なをえ留つゐてに」のすぐ右側に「なからなをか、留つゐてに」と、これも鉛筆書き。この他にも2行目「た\*御け\*」に対する頭書「た留御けし記」、7行末「心をなる」に対する「心ことなる」「(こと)は合字」など、いずれも現写本文の不通の箇所到校訂を施した書き入れであった。

こうした書き入れは、現写本を「読めるテキスト」にするための作業の過程、山岸の研究ぶりを示す素材なのである。書本が存在するとはいえ、右に例示したごとく、これはこれで山岸としてのオリジナル (original) なのであり、その意味で存在意義のあるものなのである。

#### 四 『とはずがたり』の場合

山岸博士の業績のなかでも、中世日記文学『とはずがたり』の発掘・紹介の功を欠かすことはできない。今でこそ中世日記文学の代表的作品として、古典校注の叢書にはかならずその一角を占めるまでに至ったが、山岸が「昭和十三年の冬頃」に「図書寮の図書目録」の「日本文学中の日記・紀行の部に、『とはずがたり』が収載せられてある」中から発掘した経緯は、山岸の回想の一文による子引き孫引きでよく知られている。

山岸が『とはずがたり』に直接言及した、主なものは次の三編。

- ① 「とはずがたり覚書」〔『国語と国文学』第一七卷一〇号、一九四〇年九月〕
- ② 「解題」（桂宮本叢書・第一五卷『とはずがたり』養徳社、一九五〇年三月刊、所収）
- ③ 「とはずがたりの思出」（日本古典全書『とはずがたり』月報、朝日新聞社、一九六六年一月）

いずれも著作集<sup>①</sup>に収められている。さらに、右の③には、現写本を作成するいきさつにもふれている。

私はその名称が「地理関係の書としては変だ」と考へ、何気なく閲覧した。……さて閲覧し出すと、日記の類である。蜻蛉日記や更級日記に類する紀行もある。「これは、国文学の珍貴な文献だ」と驚喜し「熟読すべきである」と、早速借覧した。借覧の序に、いち早く書写させて貰った。五冊の書写は、相当の時間を必要とすると思ったが、自分の手で努力しつつ、早急に書写の功を終った。それから製本して熟読を始めたが、句読点もなく、又、仏典の本文が、字音のまま仮名書きにせられて居る部分などには、大変に困却した。それでも、内容が豊富であり、紀行も地域的に広範囲であり、興味が尽きなかつた。

（著作集、三七〇頁）

その「熟読」を支えた現写本が、現在山岸文庫に収められている。『とはずがたり』（蔵書番号三五一六）がそれである。略書誌をあげておこう。

写本、三冊、一帙。

〔表紙〕 洪引紙表紙。

〔寸法〕 縦二七・五cm、横一九・五cm。

〔外題・内題〕 表紙左肩に無地の題簽に「とはずがたり 上（中・下）」。内題は書本題簽を模して



枠を描き「とはすかたり一（五）」と墨書。

〔体裁〕 袋綴。一面一行書。

▼上冊……卷一・二所収。卷一〇四九丁、卷二〇四四丁。

▼中冊……同、卷三・四所収。卷三〇四五丁、卷四〇三八丁、後遊紙二丁。

▼下冊……同、卷五所収。前遊紙一丁、卷五〇三四丁。

〔印記〕 表紙右裾に「山岸文庫」子持ち罫朱印。前遊紙・本文第一丁オモテ右裾にも同印あり。帙にも同印。さらに帙の裏にも青インクで同印を押す。文庫の蔵書印として最も頻繁に用いられたもの。

〔備考〕 帙裏に「山岸徳平先生 御直写の／＼とはすがたり。をお貸し頂いた／＼ご芳情ニ粗帙を作り感謝の心と致します／昭和四十一年七月卅一日／全釈刊行の日に／／呉竹同文会／水川 喜夫／和田 久／杭迫 晴司／倉本 光雄」と墨書する。

書陵部の書本は五卷五冊あるのを三冊に仕立てた現写本。書陵部本は影印が公刊されているので、比較しやすい。

それを見るに、書体も字母もそのまま書写しており、定家本によくあるような「一字も違へず書写」した本である。

『とはすがたり』は、現在「外題が靈元天皇宸翰であるから、元禄以前のもの」といわれる近世書写の一本しか伝存しない、いわゆる天下の孤本である。小松茂美による伝九条兼実筆の卷二の断簡についての報告があったし、近年、田中登によつて、伝西行筆の異文を伝存する古筆切が発見された。いずれもごく貴重な発見ではあったが、冊子体としては、相変わらず書陵部蔵本が唯一の存在なのである。

山岸が、該書を書陵部の一角に見出し、「これは、国文学の貴重な文献だ」と驚喜した様子は、そこで借覧し作成した現写本にあらわされている。上中下三冊の末尾はもとより、書本五卷のそれぞれの巻末にあたる部分に、異例な多量の識語が記されているからである。次にそのすべてを引いておこう。

#### 上冊（卷一末尾遊紙）

昭和十五年夷則二十二登不二山翌日下山

又同廿一日静岡県大宮町挙行強歩鍛錬会突読売

新聞社主催也 余与金栗氏受諾招請為講師同

月廿六日午前登山午後下御殿場 而廿七日阪京

廿九日一読開始、悪筆書写多誤字難読云



廿九日午後一時於研究室識之畢

八月三日更朱省有用 八月四日来客多々遂病病

八月五日一日休臥、八月六日校訂

作者、

雅忠女三条歟

八月九日〔此〕補入 卷読校↗

↙了 夜雨降冷氣如秋

七時廿五分於研究〔室〕脱力）↗

↙識之

### 上冊（卷二末尾遊紙）

八月十〔九〕に重書 日十一日以圖書寮〔本〕↗

↙補入）一読了

卷二ノ後<sub>ニ</sub>秋冬の事なし 尚一卷あるへきにや

昭和十六年五月九日夜、大事にやみてヨリ校訂

校訂困難 不知文字者書写焉<sub>云</sub>

翌十日於研究室校了 夜七時四十分也

（以下朱筆）原本速筆也故却多誤字歟

### 中冊（卷三末尾遊紙）

昭和十六年五月十三日 二月十八日の條より校訂をは

じむ

十四日夜於研究室校訂 十一月廿五日のあたりまで

十五日午後三時一校了 今日圖書寮へ返却

不可能なり 乃ち電話す

### 中冊（卷四末尾遊紙）

卷四

昭和十六年五月十五〔四〕に重ね書き 日校訂↗

↙をはしむ研究室にて

午後六時なり。

夜少々校訂

昭和十六年五月十六日朝校訂於拙宅

全学〔習〕補入 院

夜於拙宅

十一時半一校了

五月葵賓夜氣涼

身世忽忙吾自老

常転差眸対俗人

歳事流水〔水流〕と読むべき転倒符あり）』

### 中冊奥

とはすかたり 五冊 圖書寮本也

昭和十四年秋十一月借覽之序嘱人

書写者也 從來不知之本也

九月十六日始校訂、尔後得少閑時々加校訂之筆

### 下冊奥(卷五末尾遊紙)

卷五一冊八月十日朝於研究室読了

以図書寮本読聊書込焉云云(以上朱書)

首尾一貫、卷五是卷尾<sup>云</sup>

奥書有之否乎 無類本不可校訂也

八月十日午後一時四十分記之

岸廼舎

とはすかたり 五冊 図書寮本也

題簽 靈元天皇御宸筆<sup>云</sup>

昭和十四年十一月借覧之序令人書写者也

悪筆人書写字体不似于原本而誤写多

不堪読困々々

昭和十五年八月一読聊直付者也

### 卷五

八月十九日午後二時一校訂了 誤字等直付者也

於荒井僑居識之／岸廼舎

今朝久曾神氏来訪 未刊歌集(私家集)

平安時代六卷刊行<sup>云</sup>件談合了、

山岸文庫の現写本には概して長文の識語が付せられるこ

とが少なくないのだが、『とはずがたり』の場合は、その詳細さにおいて、特に異例というべきであろう。これらを要するに、

▼昭和十三年(一九三八) 冬……書陵部・地理の部に発見。

▼昭和十四年(一九三九) 一月……書陵部より借覧、人に書写を委嘱。

▼昭和十五年(一九四〇)

7月29日～8月9日……一読後、卷一を校訂。

▼昭和十六年(一九四一)

5月9日～10日……卷二を校訂。

5月13日～15日……卷三を校訂。

5月15日～16日……卷四を校訂。

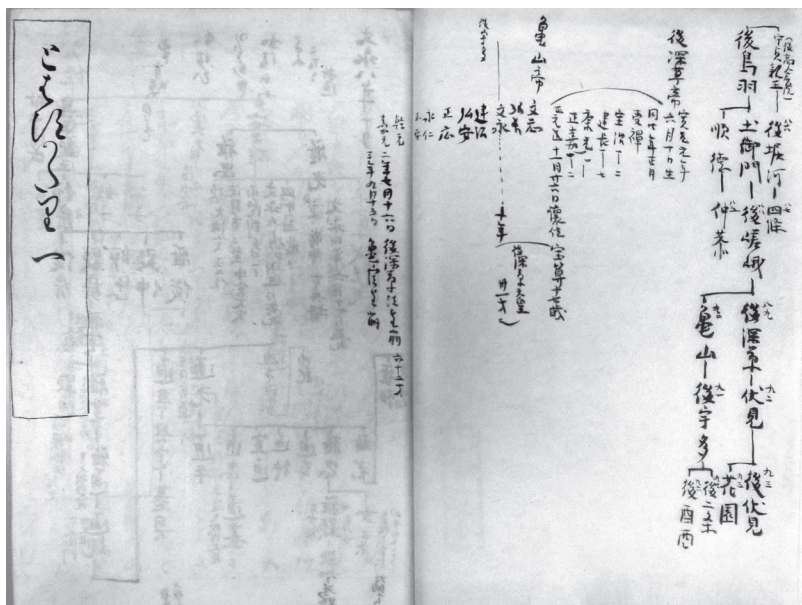
8月10日……卷五読了。

8月19日……卷五を校訂。

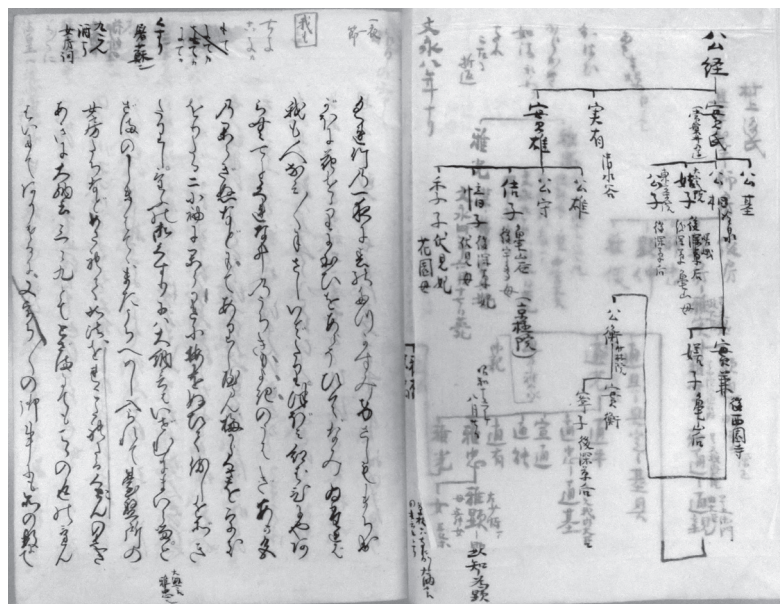
という作業の進行状況が記録されており、「興味が尽きなかった」という集中ぶりと「驚喜」した感動が読み取れるのである。

ここに、山岸文庫本三冊のうち、上冊卷一の冒頭部分を〔写真7〕～〔写真10〕で御覧いただく。

〔写真7〕左側の丁は、例によって題簽を写しとったもので、書陵部本の影印で確認していただければ、書体・字



【写真7】山岸文庫蔵『とはずがたり』上冊・遊紙～1オ



【写真8】山岸文庫蔵『とはずがたり』上冊・1ウ～2オ①





母を複写したものであることがわかるはずである。この見開きは、本来であれば他の用途はないはずではあるのだが、本日記の主要人物である後深草院・龜山院の系譜、年号が備忘的に記されている。

さらに次の丁(写真8)の扉裏(本来は遊紙ウラ)には、村上源氏・久我家の系図(『尊卑分脈』によるか)が墨書され、左下隅に「女<sup>三条</sup>／草枕(注―『増鏡』)ニハながし大納言／の女云云トアリ」と作者の名が記されている。しかもさらに、その丁裏の上部に糊付けした薄紙を付し、作者の愛人「雪の曙」すなわち西園寺実兼の系譜が記されている(写真9)。これらを使えば、そのまま作品の登場人物の概要がつかめてしまう、という体の資料である。

〔写真10〕は、〔写真8・9〕につづく二丁ウラ―三オモテの見開き。書陵部蔵本は、当然のことながら〔写真7〕の題簽を模した丁がないので、一丁ウラ―二丁オモテに相当する。一ウの中央上部に糊付けした薄紙の付箋があり、

三吉野のたのむのかりもひたふるに君  
が方にぞよるとなくなる 伊勢物語

古今六帖

と山岸の速筆で墨書されている。これは書陵部本一ウ(山

岸現写本二ウ)3～4行目、後深草院が陪膳の大納言久我雅忠に酒を勧めて、「この春よりは、たのむのかりも、我かたによ」と謎をかける箇所<sup>1</sup>に付したものの。『伊勢物語』第一〇段の歌を引いて、作者・雅忠女の献上をうながしたのである。つまり引歌の出典の指摘が付箋の意図だった。

となりの三丁オモテにはおなじような薄紙が貼付されて、右隅に「昨日の雪も」と記されているが、その後は大きく余白となっている。書きさしのまま放置された体である。

その他、全体にわたって、朱墨で句読がさしてあり、カギ括弧や傍点・傍線が付してあり、これらはいずれも、参考書が皆無の状態<sup>2</sup>で、ほぼ独力で『とはずがたり』の「熟読」にはげんでいた山岸のすがたを垣間見させるものである。冒頭の系図類は、それを抄略する形で、①「とはずがたり覚書」(著作集三四三頁)、②桂宮本叢書「解題」(著作集三五八頁)などの論考に利用されている。

頭書もまた、ほぼ全体にわたってほどこされている。典拠の指摘、関心をひく用語の抜き出し、本文校訂の試行錯誤など、さまざまな書き込みがある。

〔写真10〕の左、三丁オモテの10行目、雪の曙からの歌「契をさし心のすゑのかはらずはひとりかたしけ夜はのさころも」に対して「狭衣物語巻一／いろ／＼に」と頭書する。

現今の注釈では、『相模集』の「風の音も身にしむばかり寒からで重ねてましを夜半の狭衣」などを引いたりしてゐるが、山岸は『狭衣物語』巻一、天稚御子降下事件の直後、変わらぬ源氏の宮への心を吐露する狭衣の歌、「いろいろにかさねてはきじ人しれずおもひそめてし夜はのさごろも」(岩波古典大系、五二頁)を典拠と考えたのであろう。また、最終行末「三日法皇の」に対して「法皇 後嵯峨」と記している。「さごろも」「法皇」とともに、どの注釈書でも注記がされるところであり、読解には欠かせないところではあるのだ。山岸に『とはすがたり』の注釈書をつくる意思があつたかどうかはともかく、前記のように、手引きする参考書がない中で、写本を読み解いてゆこうとするには、注釈書作成の過程をふむような作業が必要なのだ。

『とはすがたり』という作品にふれて、「これは、国文学の貴重な文献だ」と「驚喜」したにせよ、昭和二五年の桂宮本叢書刊行の段階でようやく陽の目を見たということ、そして昭和一五、六年という時代相、当時の出版情勢などを勘案すれば、当面は注釈書を制作するアテがあつたわけではあるまい。この現写本は、あくまでも山岸個人の勉強のための素材だったのである。研究のためのノートだったのである。

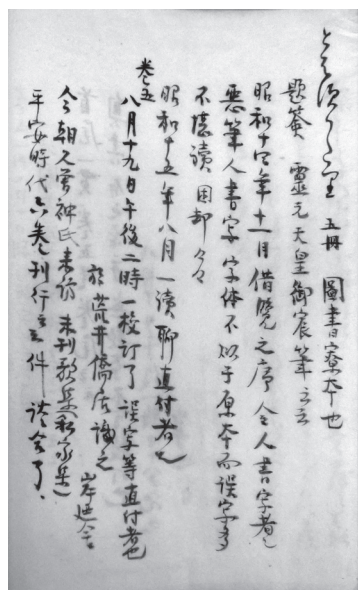
## 五 ひとまずのはじめに

山岸文庫には、数多くの現写本を蔵する。『とはすがたり』の場合は、天下の孤本であるだけでなく、文学史の一角を担う作品であつてやや特殊なものではあるが、他の現写本にもそれぞれ昭和時代における国文学研究史の裏面を支えるであろう、興味深いものが少なくない。

『堤中納言物語評解』『堤中納言物語全註解』『角川文庫・堤中納言物語』など山岸の著作の原素材となつたであろう当該物語の現写本、『とはすがたり』発見の際に引き合いに出された『蜻蛉日記』諸伝本の現写本など、興味が尽きない。順次紹介してゆく機を得たいと思う。

次に、山岸文庫本『とはすがたり』下冊の奥、巻五末の識語(本稿二五〇頁上段参照)の写真をあげて、本稿のはじめとしたい。





【写真 11】 山岸文庫蔵『とほづがたり』  
下冊の奥・巻5識語

## 注

- (1) 東京大空襲戦災誌編集委員会編『東京大空襲・戦災誌』第三卷「軍・政府（日米）公式記録集」（東京空襲を記録する会、一九七三年二月刊）、同四卷「報道・著作記録集」（同上）。
- (2) 紫式部学会編『源氏学の巨匠たち——列伝体研究史』（武蔵野書院、二〇一二年二月刊）所収。
- (3) 『桃園文庫目録 上巻』（東海大学付属図書館、一九八六年三月刊）、六五頁。
- (4) 冷泉家時雨亭叢書・第四三卷『源家長日記 いはでしのぶ 撰集抄』（朝日新聞社、一九九七年二月刊）、三角洋「解題」参照。

- (5) 市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成・第二巻』（笠間書院、一九八九年七月刊）による。一六一―一六二頁。以下、『物語集成』または『集成』と略称する。
- (6) 稿者が静岡大学教育学部に勤務した時の同僚・平形精一（精逸）教授（現常葉大学教授）の教示による。
- (7) 山岸徳平著作集Ⅲ『物語随筆文学研究』（有精堂、一九七二年二月刊）。
- (8) 田中登「『とほづがたり』の新出古写断簡」（『汲古』第四三号、二〇〇三年六月）。
- (9) 山岸徳平、前掲②稿、桂宮本叢書解題。著作集「『とほづがたり』に就いて」、三六九頁。
- (10) 久保田淳校注、新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集・とほづがたり』（小学館、一九九九年二月刊）、一九七頁。

（よこい たかし・実践女子大学教授）